

kouya kishida



岸田孝弥

経済学部教授。

1976年日本大学大学院生産工学研究科博士課程修了、工学博士。(財)労働科学研究所員、米国マサチューセッツ大学IE&OR学科客員講師を経て、1976年高崎経済大学専任講師、1977年同助教授、1984年同教授、2002年高崎経済大学大学院経済・経営研究科教授、(専門)人間工学、産業・組織心理学。

所属学会：

産業保健人間工学副会長、産業・組織心理学会常任理事等

著書：

マクロ・アーゴノミクス、中小企業と労働条件
(共に高文堂出版社)

働くこと



働くとはどんなことなのか考えたことがありますか？みなさんが働くことをイメージするときに、助けになるのは、おそらく高校生の時や大学生になつて行ったアルバイトの経験かもしれません。確かにアルバイトの経験も働いた経験の1つに違いありません。しかし、現実はずっと厳しいものです。今年の7月1日の朝日新聞くらし欄に、『新入社員もダウン寸前―即戦力でいきなり深夜・休日出勤―』、『残業月70〜150時間』、『普通の生活を送りたい』、『睡眠

過労死と KAIZEN

—働く事を考える—

過労死を認定するには！

3〜4時間で休みなし」という見出しの記事がでていました。この日のタイトルは「過労社会」。過労死は『Karoshi』と書かれて英語になったのです。大学を卒業して、企業に就職する。毎月25日か月末には給料が自動的に銀行の口座に振り込まれる。そんな生活を思い描いている人も多いのではないですか？現実はそのなにごくありません。今年3月に卒業したゼミ生は、2月から某テレビ局に入社し、5月には辞めてしまいました。憧れのディレクターであり、正社員であったのです。実際はディレクターとAD(アシスタント・ディレクター)の2役をやらされ、睡眠時間は3〜4時間、燃えつきる前に退社したのが真相でした。このようなことは現在の不況下ではごく当たり前と考えた方がよいようです。

平成13年12月に過労死と関係の深い脳・心臓疾患の労災認定基準が改正されました。新認定基準の主な改正点を見ると

- (1) 認定要件に長期間の過重業務を追加し、その評価期間をおおむね6ヶ月としたこと、
- (2) 長期間の過重業務の負荷要因としては労働時間が最重要とし、労働時間評価の目安を示したこと、
- (3) 業務の加重性を評価するための具体的負荷要因(労働時間、交替制・深夜勤務、精神的緊張を伴う業務等の7項目)を示したこと、
- (4) 過重負荷評価の対象労働者について、「基礎疾患を有していたとしても日常業務を支障なく遂行できる者」という表現を加えることにより、過重負荷評価の対象労働者を明確化したことの4点です。

この認定基準改正に引き続いて、平成14年2月に、厚生労働省は、過労死予防対策として、「過重労働による健康障害防止のための総合対策」を策定しています。

役所が考えている過労死の考え方は上記のようですが、働く者にとつての過労概念を知っておくことも大切です。中央大学の斎藤良夫教授は、労働者が過労かどうかを決める基準は、人間内にあるのではなく、「望ましくない労働・生活状況」の有り方にあると述べています。これを具体的に状況で説明すると、夜勤・交替制勤務、長時間労働、高い作業密度などの労働条件下で働いた結果、ミスの発生、能率の低下、不快という「労働の質」の低下や健康障害の発生・増加があげられます。

過労とは！

過労死を予防するためには時間外労働の削減や健康管理対策を企業がすべきであると厚生労働省は言いますが、働くものとしては、自分自身で「望ましくない労働・生活状況」を常にチェックすることが必要なのです。

過労死するほど働くのが日本の企業文化として根付いてしまったとは思いたくないですが、『Karoshi』と同じように英語になった日本語にKAIZENがあります。KAIZENはカイゼンであり、改善と漢字で書きます。英語で改善はimprovementですが、KAIZENはimprovementと同じではありません。英語のimprovementは金をかけて良くしようという意味合いが強いため、KAIZENを表現させようとすると少しニュアンスがずれてくるのです。日本の企業では、よくトップが社員を叱咤激励する際に使う言葉として「金が無ければ頭を使え。頭がなければ汗を出せ」が広く使われています。この言葉の意

味は、金をかけないで知恵をしぼり、改善をせよということなのです。「汗を出せ」には現場で率先して働いて、問題解決を図る努力をせよという意味が込められています。

KAIZENには、三現主義即ち現場、現物、現実(3G)と低コスト(C)がキーになります。現在はコンピュータ時代です。いちいち実際の現場に行かなくても、コンピュータ画面で現場に行くことができます。コンピュータ画面で実際と同じように仕事ができます。しかしそれは仮想現実(バーチャル・リアリティ)であつて現実ではありません。当然ながら使用しているものもコンピュータ上のもので現物ではありません。よくコンピュータでシミュレーションしたから、計画通り作業がうまくいくと言いますが、それは間違いです。現実複雑で、コンピュータでシミュレーションして解決できるほど簡単ではありません。KAIZENはそんな現実をふまえて、現場で、現物を見て、低コストで解決しようとする考え方です。道具として人間工学チェックリストが使われたり、参加型人間工学の考え方を取り入れて、グループワークをしたりします。QCサークルもその一つです。経営学科ではこのようなことも学べます。

KAIZENの 考え方

授業先取り、 いろいろ取り

kouya kishida

特集1